

本田財団レポート No.2

異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって

東京大学教授 公文俊平

本田財団関係者とディスカバリーズ活動にご協力をいただく方との交流と、最新情報の交換を目的とした本田財団懇談会を継続的に開催してゆくこととなりました。

第1回懇談会は、東京大学教授 公文俊平氏(弊財団評議員)に「異文化間コミュニケーションの問題をめぐって」と題し、講演をお願いしましたので、本田財団レポートNo.2として収録させていただきました。

なお、この講演は昭和53年5月18日、国際文化会館において行なわれたものです。

I はじめに

日本文化の伝統からいうと、このような場合に、最初にいろんなエクスキューズを並べ立てなければならぬ決まりになっていると思います。また事実いろんなエクスキューズを申し上げなければならぬ気持は私もしております。大体、今日がこの財団の第一回懇談会であるという。そういう重要な会であるということとはつゆ知らず、はなはだ気軽にお引き受けして、果たして二回目、三回目のための良い先例になるかどうか、まるで、自信がございません。

今日ご出席の方々のお顔を拝見いたしますと、どう考えても私よりは、異文化間のコミュニケーションという問題についてお話する上でのご経験なり、いろいろなお考えなりが豊富で、はるかに適切な方ばかりでいらっしゃいます。その点では本当に恥ずかしいんですけども、お引き受けした以上、やむを得ませんので、大変いたらないお話をさせていただきまして、むしろ大いにお叱りや、ご教示をいただきたいと思っております。

● ミスコミュニケーションの逸話

文化を異にする人々の間のコミュニケーションといったことを話題にしようとする時に、すぐ思い出すアネクドートのようなものがいくつかございます。たとえば、これは青山学院大学にいらっしゃる三橋さんという地理の先生にうかがった実話なんですけど、非常に貞淑で、かつ夫のために献身的に尽す日本女性に憧れたアメリカ人男性と、女性の権利を非常に尊重し、愛情をもって、奥さまのためにサービスにこれ努めるアメリカ男性に憧れた日本女性とがめでたく結婚して、新婚早々でありますけど、二人でお芝居を観に行ったそうです。冬のことでありまして、コートを着て行って、クロークにコートを預けた。そして芝居が終わって、クロークでコートを受け取りまして、二人とも後を向いて手を出して待っていたんだそうです。

つまり女性のほうから言えば、これはアメリカ男性たるもの当然自分にコートを着せてくれるべきであるし、アメリカ男性からいけば、日本女性は当然俺に着せてくれるべきはずであるということ、それぞれ待っていたけれど、どちらも着せてくれなかったというんで、たいへんお互いが憤慨したという話がございます。

それからもう一つ別な話ですが、外国人による日本語弁論大会の入賞作を集めた本があるんですけど、その中のアメリカの学生でリチャード・オムズビーという人が、自分の名前を発音するとオムズビときこえ、従ってオムズビさんとは非常におかしい変な名前であると日本人が思う。そういうことで友達になるには楽なんですけれども、ともかく日本人は彼の名前をきくとおもしろがってゲラゲラ笑う。彼はそのことをまず紹介した上で、こういう感想をもらしております。

「おもしろいのある日本人は、どうしてもオムズビーというれっきとした名前を、この地上から抹殺したいらしいです。他人の立場に立って考えるという日本人生来の美德が否応なしにそうさせるというわけです。」つまり日本人は——相手が自

分たちと同じような人間だと思って相手の立場に立ちますと、確かにオムスビなんていう変な名前の持ち主は気の毒で、その人は劣等感にさいなまれるであろう。従って当然のことながらそういう変な名前は、ないほうがいいだろうというか、あるいは改名したほうがいいのかというふうに思う。これはわれわれの勝手なおもいやりでありまして、オムスビ氏にしてみれば、それは文字通り余計なお世話で、彼の名前は誇るべききれいとした名前である。それなのに、——ここにご出席の皆様はそうではないと思いますが——多分多くの日本人は相手の身になって思いやっているつもりだが、しかしわれわれの文化の範囲内で思いやりを発揮している。そこでミスコミュニケーションが起こるといふふうな例があるかと思えます。

それから私自身の体験でいいますと、以前カナダに教えに行きました時に、あるジャマイカ人のプロフェッサーがおりまして、彼が非常に親切にしてくれました。車がないというので、彼は中古の車を買う契約までしてくれまして、相手の家に私を連れていってくれ、そこから私のアパートまで送ってくれました。その時、彼曰く、「俺が後を走って行くから、おまえは先を走れ。そしてお前は道を知らないだろうから俺が道を教えてやる。おまえはしょっちゅうバックミラーを見て、よく俺の出すウィンカーに注目していろ。左に曲るときは左に出せ。」そう言われた時、不思議なことをする人だと思ったんですけど、ともかくほかにしようがないわけですから彼の言うことに従いまして、もう死ぬ思いでバックミラーばかり見ながら慣れない車を運転して帰って来ました。

帰りついた時、彼はよくやったと言ってほめてくれまして、それからひよいとこう申しました。「ひとに追突はされたくないからなあ」と。つまり彼の好意の範囲はそれまでである。

II 異文化とは、コミュニケーションとは

これに類した体験は恐らく皆様方もたくさんお持ちだろうと思うんですけども、その種の話をもっといくつか思いうかべた上で、きょうのテーマに入っていきたいと思えます。異文化間のコミュニケーションというとき、いったい文化を異にするとはどういうことなのかをまず考える必要がある。あるいはそもそもコミュニケーションとか文化とはどういうことなのかと考えるみますと、必ずしもはっきりしているわけではない。多分いろんな定義が可能だろうと思うんですが、私はこの間『社会システム論』という本を書きまして、その中で文化ということばを仮に次のように定義してみました。

つまり文化とはいくつかの主体の間に共有されているところの世界観や価値観、ないしは世界イメージ、あるいはそれらを表現する言葉。さらには主体が共通に使用する手段、あるいは財ですね。そしてそれらを用いて行なう行為のパターン、それからさまざまな制度。そういうふうな共有されているものの総体が文化である。

また、コミュニケーションとは、以上のような文化の定義を前提にしています

と、まず第一に、ある同一のイメージを異なった主体の間に伝達し合い、共有することである。より広く言えば、文化をつくることである。というふうに定義してみることができるかと思います。

しかしコミュニケーションをこのように定義しますと、恐らく“異文化”間のコミュニケーションというものはそもそも成立しようがない——いちばん極端に考えますと。いいかえれば文化をすでになんらかの程度共有する場合に、恐らく初めてコミュニケーション、つまり、新たなイメージの伝達、共有が可能になるだろう。

他方、お互いの間になんにも共有するものがないとすれば、相互理解のしようがないはずである。そこまで言わなくても、少なくとも共有されている文化の中身が少なければ少ないほど、新たなものを共有するプロセスは発生しにくい、困難である、ということはいえそうです。

●「濃い文化」と「薄い文化」

それからそれに加えて、さまざまな文化があるとしますと、恐らく文化によって主体の間に共有されているものの程度が違う。いわば「濃い文化」——非常に多くのものをすでに共有しているようなタイプの文化と、比較的「薄い文化」といいますか、お互いが共有している世界観、価値観、あるいはイメージ、財、制度等々の量が少ない文化というものも多分あるだろうと思います。

文化によってそういった違いが仮にあるとするならば——その程度をなんで測るかはむずかしいと思いますが——「濃い文化」のほうはその中でのコミュニケーションが比較的やさしい。薄い文化のほうはコミュニケーションが相対的に困難であるということが言えるかもしれません。そういうふうに考えてみますと日本人あるいは日本文化は多分濃い文化に属する。非常に極端に言うとなれわれは言葉もあまり必要がない。なくてコミュニケーションが成立している場合が多い。

たとえば、先程の弁論大会の本から引用しますと、ある外人がこういう観察をしています。この間二人の日本人が話しているのをきいていると、こんな話をしておりました。「さあ、それはどうも。」「まあなんといいですか、」「こんなところで何するのも何ですから、いずれそのうちそのへんでどうでしょうか」……。これは全然翻訳のしようがない。しかし明らかにこのやりとりを第三者として観察しているならば、話し合っている二人の間に何かが伝達され、何かが共有されたことだけはほぼ疑いない。それがなんであるかわからないにしても、いずれにしても、日本人はこういった会話で結構用が足りている。家庭の中なら、「おい」の一言で、あるいは発音さえしなくても、夫婦の意志が通じる人も多いでしょう。しかし同時にこの日本人が不思議なことに、外国人から日本語で話しかけられると、そこで用いられている日本語そのものをまるで理解できないという現象が、非常にしばしば発生するようであります。このこともいろんな人が指摘しております。

たとえばある留学生ですが、切符を買うときに使う日本語を教わって、たとえば「渋谷、片道一枚」とゆっくり発音すれば、駅員は理解してくれるはずである

と日本語学校の先生から聞いた。そこで駅へ行って、「渋谷、片道、一枚」といいますと、「だめだめ、ジャパニーズ・プリーズ・ノー・イングリッシュ」と駅員が言った。そこでまた、「渋谷、片道、一枚」といったら、やっぱり「ノー・イングリッシュ・ジャパニーズ・プリーズ」といわれた。で、憤慨して、先生のところに行って、「通じませんでした」といったら、その一部始終を聞いていた先生が膝をたたいて、「ひとつ言うことを忘れていた。何か日本語で言う場合にはその前に“すみませんが”と言いなさい。これがこれから日本語を私が話しますというスイッチのようなものだ。そういうと大抵の日本人がわかってくれるだろう。」といった。

確かにそうかもしれません。しかし必ずしもそうでない場合もたくさんあるので、もう一つの実例を挙げますと、これはある日系二世と結婚したアメリカ人の体験ですが、その二世の奥さんは顔つきは日本人そのものであります。

しかし彼女は日本語が話せない。そしてご主人のほうは日本研究者でありましてきわめて流暢な日本語を話す。この二人が汽車に乗りまして、指定席にすわったけれども、たまたま指定席券を持ってなかった。そこへ車掌がやってきて、なぜ指定席券をもっていないんですかと奥さんに向かって質問する。奥さんはわからなかったからご主人の顔を見る。ご主人が日本語でかくかくしかじかと説明する。しかしその車掌は不思議なことに絶対にご主人の顔をみない。つまりあくまでも奥さんと話をしているようにふるまうわけですね。つまりその日本語は奥さんから発せられたことばであると想定する。そこでまた奥さんに向かって問いを出す。またご主人が答える。それを数分間繰り返して、結局最後までその車掌さんは奥さんとの間で日本語で話したという態度を取り続けた、というのですが、これもよく聞く種類の話であります。

もちろん例外もあると思いますが、そういった種類の体験をもっている外国人は非常に多いようであります。

以上の話を裏返せば次のようにいっていいかと思えます。少なくとも顔つきその他の面でお互いが日本人であるという枠組を前提とし確認した上で、日本語を作って話しているし、あるいはその場合には徹底的に言葉の省略をして、ギリギリのところまでコミュニケーションがちゃんと成立している。だが、この前提が崩れると、いっぺんにコミュニケーションは成立しがたくなる。

● コミュニケーションの別定義

これまでのお話は、ひとつの立場から来る考え方かと思えますが、これに対してコミュニケーションという言葉の定義を非常に異なった形で行うことも可能であります。これはきょうお願いしてご出席していただきました、マクマスター大学の林吉郎さんに教えていただいたんですけれども、アメリカのセイヤーという学者によれば、コミュニケーションは、私流のことばに引き直していうと、恐らく「主体がなんらかのかたちで、自分のイメージを形成するプロセスである」、あるいは「外部からやってきたインフォメーションを、その主体にとって意味をもつメッセージに変換するプロセスである」と定義されているとあってよきそうで

す。そして「インター・コミュニケーション」とは、そういったイメージ形成、あるいは情報のメッセージへの変換のプロセスが主体の間で相互に行なわれる過程であるという。これは確かに一つの定義であります。もしもそのように定義するならば、コミュニケーションに際してお互いの間になんらかの共通の理解が成立する必要はまったくないということになります。まったく違ったことをそれぞれが理解したとしても、「インター・コミュニケーション」は行なわれたということになります。

しかし、私の考えでは、これは非常にエゴ・セントリックな定義です。あるいは恐らく異文化間コミュニケーションないしは同一の文化の間でも、私のいったような意味でのコミュニケーションがうまくいかないということに業を煮やした人が考えた定義ではあるまいかと思えます。実際コミュニケーションという言葉のもともとの意味（ラテン語のコミュニケーションは“共通にする”といった意味のことばだと思えますが）を生かすならば、何か共通のことがなくて、まったく一方的に行なわれるようなものをコミュニケーションというのは、いかにも私としては不思議な感じがいたします。しかし恐らくこれほど左様に、とりわけ異文化間のコミュニケーションを成立させるのはむずかしいことなのかもしれません。

III コミュニケーション促進のために

● 違 い の 自 覚

異文化間のコミュニケーションを、できないといってしまえばこれで話はおしまいですから、多少ともやらなければならない。またできるようにしていきたい。ところで、共通の理解が成立するという意味での異文化間のコミュニケーションを促進しようとする場合には、どんなところに解決すべき問題があるのだろうか。これは多分一般論としてはたいへんむずかしい議論でありまじょうが、少なくとも日本人としてのわれわれにとっては、恐らくまず第一にわれわれ自身の文化がどういうものであるのか。で、それが他の国々の文化とどう違うのかという点を、かなり明確に自ら意識する必要があるのではないかと思えます。

● 間柄主義と個人主義

この点についてはもちろん日本人論、日本文化論が花盛りでありまして、いろんなことがいわれているわけです。それらの議論の中で私が一番共感しているような日本文化の特徴づけとしては、和辻哲郎さんの『人間の学としての倫理学』に始り、木村敏さんの『人と人之間』その他で発表された「間柄主義」として日本文化をとらえるものがあります。

それに対して欧米系の文化はいわゆる「個人主義」である。この二つの文化は人間世界の事象を言語化し概念化していく上での対象化の方向とでもいうべきものがかなり違う。一方はより分析的に進む。つまり社会関係をかたちづくっている要素に着目し、そこから「個人」というものを取り出してくる。そして社会は

個人と個人との間の関係だというふうに理解していこうとする。しかもそうした関係の全体を考える前に個別的な関係のあり方に着目する。個々の契約関係、個々の権利、法律関係、こういうふうなものに着目して行って、そういう個々の関係から織り出されているというかたちで全体を理解する。その場合、そういうふうにして扱えられる全体なるものは、どちらかといえばフィクションであるとされる。実在するものはなによりもまず個人である。そしてそれよりも実在の程度がやや薄いのが個人間の関係だ。一番実在の程度が薄いのがそういう関係の総体だというわけです。

これに対して日本人、あるいは日本文化——ほかの文化にもあるかもしれませんが——は、むしろ個体よりは間柄のほうに着目し、そちらを対象化していく方向に進んでいったのではないか。三戸公さんの『公と私』という本の中に、三戸さんがイギリスで公と私——パブリックとプライベート——ということについて、英語の先生といろいろ討論した経験が書かれていますが、そのときにパブリックとプライベートは形容詞ですよということをイギリス人が強調した。ところが日本語における公と私はずは名詞である。三戸さんはこのちがいに注目しておられるわけですが、私はこれこそまさに間柄の対象化であって、日本人にとっては非常に自然な考え方であろうと思います。

そして日本人という存在は——少なくとも中世以降の日本人は——恐らく間柄と切り離してはほとんど考えられないような存在である。間柄から切り離れた個体は、ヨーロッパ流の「個人」ではない。「パーソナリティ」はもたない。そういうパーソナリティをもたないいわば無定型の個体を表現することばとして、浜口恵俊さんは、人間をひっくり返した「間人」ということばを使おうと提唱しておられます。「間人」が間柄の中に入ることによって「人間」になる、つまり人間とはそういう間柄を満たしているような個体、および個体によって満足された間柄を共に指すといつてよいでしょう。

また木村敏さんのいい方を借りますと、間柄に入ることによって、われわれは初めて「自分」をもつことができる。あるいは、自分になる。自分ということばは、間柄のうちの、おのれ（自）に属するシェア（分）を指しているといえる。他方、間柄はいろんな「分」をもっている。そもそも、間柄には全体としての「気」、あるいは山本七平さんのことばを使えば「空気」がありますが、それを間柄に入った人間が分けもつのが「気分」です。間柄にはまた、さまざまな「職分」があり、それを個体との関係で見ると、己の「分際」とか「本分」とかいうふうない方が成立します。さらに、ある職分を満たす個体の資格として「身分」がある。

このような日本の間柄主義と、個人を対象化する方向に進んだ個人主義の文化との間には、ある大きな違いがあることは確かであります。

● 情念優位型と理性優位型

それからもう一つの違いとしては、最近ベストセラーになっている角田忠信さんの『日本人の脳』に指摘されているものをあげてよいだろうと思います。つまり、極端ないい方をすれば、日本人は専ら左の脳で生きているという点です。左

の脳は言語を処理する脳であり、右の脳は音楽や雑音を処理する脳であるということになっているけれども、日本人の場合はヨーロッパ人にとって雑音であるものがほとんど言語としてはいつてくる。つまり虫の声とか風の音とか、われわれのたてる物音、これらは全部言語として処理されているらしい。

そういう「言語」の範囲が日本人は非常に広い。しかもその言語は理性のことばであるよりは、情念のことばであるらしい。その点を強調した議論が、グレゴリー・クラークさんの『日本人』にみられます。この本の序文でクラークさんはこんなことをいっています。日本と中国とは非常に違う。自分が北京や香港の空港に下り立つときは、自分の知的なふるさとへ戻ったという感じがする。つまりわれわれと同じように考えたり分析したりする人たちの間に入っていきんだと思う。ところが羽田に下り立つときは、自分のエモーショナルなふるさとに帰ったような気がする。つまり情という面では日本人は発達もしているし、人類におけるある共通なものを非常に強く残している。

これに対して西洋や中国やインドの社会は、恐らく部族の時代に他部族との戦争という傷を通して、「イデオロギー化」が進んだ社会である。つまり理のことばを発達させて、それでもっていろいろな人間関係を処理していくようになった。日本人はそういう理のことばを発達させていない。むしろ情のことばでもって物事を処理していく。これがクラークさんのポイントです。確かに私も日々痛感することですが、学問的な討論でも、感情と切り離して行なうことは非常にむずかしい。うっかり他人の意見に批判がましいことを言うと、甚しい場合はその場で大げんかになる。それほどでない場合はにっこり笑って許してくれたように見えるけれども、次からは口もきいてもらえないことになる。まあそこまでいえばやや誇張になりますが、それに多少とも類した経験は多くの人が知っていると思います。建て前としては情と理は切り離すべきであるとされているけれども、実生活のなかでは両者を分けることはなかなかできない。

ことによるとそれは、大脳新皮質の右側と左側の使い方の違いだけではなくて、ひょっとすると旧皮質と新皮質の関係についても、日本人と欧米人との間には違いがあるのかもしれない。そのことを私は、昔アーサー・ケストラーの『機械の中の幽霊』を読んだときにふと思ったことがあります。この本の中で、ケストラーは人類は本質的に狂気ではあるまいかといっています。なぜかという旧皮質と新皮質をつなぐものが、少なくとも解剖学的にはみられない。従って人間の脳においては、専ら理性のことばを語る部分と情念のことばを語る部分は別々に発達している。それをつなぐものが見当たらないじゃないということは、人間は本来精神分裂的だということの意味するものではないか、というわけです。

しかし、この点についても、日本人と欧米人とでは、どうも少し違いがありはしないかと私は思います。たとえば、日本人に比べてアメリカ人はある瞬間には極めて激越な感情の吐露をする。ところがパッと冷静になって、そしてまた理屈をいはいはじめる。それからまたしばらくすると、ののしり言葉がわっと出てきたりする。私の目から見るとその振幅が非常に大きい。しかも、短時間の間にスイッチがされる。ところが、日本人でありますと、なるべく既存の間柄を傷つけない

いように隠忍自重し、どうにも我慢ならなくなって、やっと立ち上がる。かっとして我を忘れる。その時にはしゃべるんじゃなくて多分行動で示すことが多い。しかも、いったんそこまできたら、もう冷静に戻ることは非常にむずかしい。

というわけで、どうも感情のレベルと理性のレベルのスイッチングの仕方も、日本人と欧米人とでは違うみたいだ。そして、角田さんの発表がこの場合にもあてはまるとすれば、その違いは遺伝的、生理学的なものではなくて、文化的なものだ、ということになるでしょう。ともかく、こういった点の研究ももっと進むといいと思います。

● 共通な枠組の模索へ

さて、以上みたような個人主義的でロゴス優位型と間柄主義的でパトス優位型の文化があるとして、両者の間のコミュニケーションはどうすれば円滑に行なわれうるのでしょうか。まずはお互いの間の違いを自覚することが必要でしょうが、それにしてもただ違うんだということを確認しただけでは話にならない。あるいは違うんだからどうせ東は東、西は西だ。お互いに理解できるわけではない、といってしまえばそれで終わりですから、そうではなくて、それでもコミュニケーションは可能だということをお願いとすれば、この両者についての共通なものを探さなければならない。この両者をおのおのある特殊なケースとして含むような一般的な枠組を考えてみる必要がある。

一つか二つそのための例になりそうなものをあげてみますと、たとえば、ハバート・パッシンさんは『遠慮と貪欲』という本の中で漫画のポパイが好んでやる啖呵、

“I am what I am and that's what I am.”

を引いてこの意味は日本人にはピンとこないといっておられます。確かにその通りだと私も思います。しかし同時に、私はそこでの“アイ”を“わが社”とか“当家”という言葉に置き換えると、非常によくわかるのではないかと思うのです。たとえば「わが社はわが社だ。それがわが社のわが社たるゆえんだ。」と言えば我々にはピンとくるのではないのでしょうか。だとすれば、そこには、ある共通の枠組がえられたこととなります。

あるいはまた、ヨハネ伝のはじめの「初めにことばありき。ことばは神とともにありき。ことばは神なりき」という有名な一節はこれまた何のことだかわからない。ベンダサンの『日本人とユダヤ人』は、この“ことば”を“言外”と置きかえてみてはと提案しています。それでもいいかもしれませんが、その他にもたとえばその“ことば”を“間柄”と置き換えてみる。そして“神”を“人”ないし“人間”と置き換えてみるのはどうでしょうか。「初めに間柄ありき、間柄は人とともにありき。間柄は人間なりき」としてみる。そうすると何かしらわかったような気が少なくとも私にはしてくるのですがいかがでしょうか。

そうしてみた上で、その両者に共通な枠組のもつ論理をより自覚的に構築して、みるのが有用だろうと私は思います。

いいかえれば、われわれは、まず第一段階として日本の社会を分析するのに適

切な枠組を、恐らく日本語の日常言語の中から取り出してそしてそれを理解の言葉に純化してみる必要がある。その上で、さらにそれを前提として、もう一段深い理解を可能にするようないわば万国共通のコンセプトづくりを試さなければならない。これが理論のほうの課題だろうと思うわけです。

●「第2次接触」の時代には

それから、より実際的なレベルでは、これはたまたま今月号の「通産ジャーナル」に経済企画庁の愛甲さんが、「もう一つの日本人論」という論文を書いておられて、大いに共感して読ませていただいたのですが、愛甲さんの言葉を借りれば、「イオン交換膜」が日本の国の外側に張りめぐらされていて、われわれは都合のいいものだけ取り入れる。都合の悪いものは入れない。あるいは都合のいいものだけ外に出す、悪いものは出さないというやり方をこれまでしてきた。愛甲さんのいわゆる、文化の「第一次接触」の過程ではそれでもいいのかもしれない。しかし昔であれば軍事的な侵略支配というふうなことがある時代。今日であれば軍事ではないにしても、非常に密接な経済的な関係が深まっていくような時代、つまり「第二次接触」の時代にあっては、そういう半透膜的なやり方ではもはや不十分だ。あるいは否応なしにその方式の変更をせまられつつある。

その時は何をなすべきか。二つの大事なことがあるだろう、と愛甲さんは提唱されています。一つは、われわれ自身のあり方や行動を外に対して理解可能、あるいは予測可能なものにしていく。つまり、日本はどういう文化をもち、どういふふうな社会の仕組をもっているのかを明らかにする。また、日本人はいま何を考えており、この次は大体こんなふうに行動するだろうという範囲を示してやる。それが大切だ。それから第二に、日本の行為が他国に与えるインパクトを絶えず考慮して、自らの行為の選択をしなければならない。

この二点はいずれも、もっともなことだと思いますが、ただしそれではどうやったらそれができるのかという問題が残っています。さきほど申しましたようにわれわれは確かにある意味では非常に他人に対するおもしろやりの深い。それはわれわれの美点でしょう。しかしその“他人”が、ベンダサンの言葉を使うならば、日本教徒ではない異教徒であるならば、それはもう他人でさえない。あるいはわれわれが考える世間の枠の外にあるような存在ならば、そういうものへのインパクトなんか考える必要はないという傾向も多分もっている。それはわれわれの欠点でしょう。これらの美点と欠点とは、ひとつのことの裏表かもしれませぬ。こういう文化の持主が他へのインパクトを適確に(?)考慮し得るためには何が必要とされるのでしょうか。

その辺が私のよくわからないところでして、皆様方から是非いろいろとお教えたいただきたいと思っています。